

平成24年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	「東北地方太平洋沖地震」で被害を受けた漁村部と地域住民の現状と支援課題に関する実践的調査研究
------	--

研究代表者

氏名 水津 嘉克	所属 人文社会科学系・地域研究分野	職名 専任講師
-------------	----------------------	------------

研究分担者

氏名 橋村 修	所属 人文社会科学系・地域研究分野	職名 准教授
出口雅敏	人文社会科学系・地域研究分野	准教授

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度)

本研究の第一の目的は、昨年度重点研究費をうけ橋村・水津で進めてきた『「東北地方太平洋沖地震で被害を受けた漁村」の現状と支援課題に関する調査』の継続と更なる前進であり、さらに人類学を専門としフィールドをフランスに持つ出口をメンバーに加え新たな視点からの分析を試みることをもう一つの目的とした。

出口報告では、震災・津波・原発事故に関する海外（主にフランス）での報道を通して「日本人」「日本文化」がどのように語られているかが論じられている。震災当初日本人の「冷静さ」が肯定的にこぞって報道されたことは一般にも認識されているが、その後その語り口が微妙に変化している。震災後の「日本人」は、日本人の「自然観」「宗教観」という日本の「基層文化」と考えられている解釈フレームか、近年欧州で日本を捉える際に新しく登場したフレームである「マンガ」・「アニメ」などにみられる世界観のいずれかによって論じられているのである。

橋村報告では、改めて被害当時の東北地方の漁村の写真に掲載し、その被害状況とその後の経過などに関して論じられている。圧倒的な破壊を受けた写真をあえて二年後にみていくことで、そこには「復興」だけでは論じきれない問題が残っている事が浮かび上がる。それは「震災・津波の記憶をどのように残していくのか」という課題である。そして翻ってその事は1833年の三陸沖地震の記憶（教訓）へと繋がっていくことが示唆されている。

水津報告では、昨年フィールドワークを行った千葉県旭市の津浪の被害状況を時系列的に整理することを試みた。何度か押し寄せている津波の正確な時間と津浪の被害に遭った方へのインタビューデータをつき合わせるにより、「日常生活の時間感覚」のなかでいうならば、津浪は「考える間もなく」押し寄せていることを確認した。「一刻も早く高台に逃げること」「初動動作に違い」などが津浪の被害を逃れるうえで重要であることは既に多く報じられているが、それが我々が日々生きている「日常（感覚）」では容易ではないことが結果的に浮かび上がった。

被災地がいわゆる「クライシス期」を脱しつつあるなか、昨年度とは異なる角度から三つの報告を行えたこと。そしてその一方、この震災・津波・原発に関する社会科学的な長期的な調査・検討の必要性を改めて報告者三人が認識させられたことが本報告書の大きな意義であると考えられる。

しかし、今年度は昨年度に比べるならば十分なフィールドワークができなかったこと、水津・橋村・出口の間で研究会など相互に意見交換をする時間を十分にとれなかったことは大きな反省点である。

先にも述べたように震災・津波・原発の問題は終わったわけではない。来年度にむけて新たな課題としたいと考える。

研究成果発表方法

[発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。]

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。  
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

・研究成果報告書『「東北地方太平洋沖地震」で被害を受けた漁村部と地域住民の現状と支援課題に関する実践的調査研究』の作成